# 第15回　夏期福音特別集会（2）（鹿沢）

# 新次元の人――エペソ書第2章――（縮小版）（21）↓（10）48％

１９６８年８月24日
小池辰雄

御霊の世界というものは物の世界を自由に支配する。パウロが、「有れども無きがごとく、無けれども有るがごとく」と、コリント後書6章で言っている。では、エペソ書2章です

1 **さて、あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。**

2 **この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な者たちの内に今も働く霊に従い、過ちと罪を犯して歩んでいました。**

「あなたがた」と語りかけているのは異邦人です。空中を司る悪霊、キリストにあらざるところの霊。キリストの霊に逆らう最高の霊はサタンである。彼は神に不従順であった。人間の不従順は、もとはサタンがやった。それを人間が受け継いだ。「不従順な者たち」ということは、サタンの子ら、キリストを受けざる者たちのことです。

本当の自主なるものは、本当の奴隷でなくてはなれない。何の奴隷か。神さまの奴隷です。パウロが、「私はキリストの奴隷、キリストの僕」という。キリストは、「われは神の僕」と言った。畏るべきものに対して本当に平伏すひとだけが自主を持つ。「不従順な者たち」は、そういう霊の手下になっていて、これがわからない。今は世界はおおかたそういった手下になってしまった。

3 **わたしたちも皆、こういう者たちの中にいて、以前は肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、ほかの人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。**

私たちは神の怒りの対象であったということ。パウロも自分でそれを知らなかった。いわゆる勝手気ままな自由は、実は「不従順の者たち」である。

4 **しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、**

神の大慈大悲、大愛というものは、人間の側のどんな事態も、「これはいかん」と言って切ってしまわない。神の憐れみというのはどん底の憐れみです。これ以上の憐れみはないという憐れみ。豊かな憐れみの故に我らを愛する大慈大愛をもってということ。

5 **罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、――あなたがたの救われたのは恵みによるのです――**

罪というのは死を持つ。「共に活かし」とは、活力を新しく与えるという字です。そういった恵み。愛と言おうが、恵みと言おうが、同じです。

**6キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。**

と、素晴らしいことが書いてある。これはコロサイ書3章を読みますと、

**「1汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼処（かしこ）に在りて神の右に坐し給うなり。2汝ら上にあるものを念（おも）い、地に在るものを念うな、3汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。4我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」（コロサイ3・1～4）**

汝らの生命は神の懐の中に入っているよと、キリストと一緒に。これはもう向う側のはなしですよ、「共に甦えらせ」と。キリストと共に復活させられてしまって、「われキリストと共に十字架されたり。もはや生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生くるなり」とパウロが言った。それは正に、「共に天の処に坐せしめ」られる。我々は地界にありながら、天界にある。一如になっている。パウロの現実というのはもはや天地一如の現実です。

「身を捨つる身はなきものと思う身は天一自在うたがいもなし」と。これは木喰上人の歌です。「身を捨つる身はなきものと思う身は」と。もう身を捨てようにも捨てられない。どこに自分の身があるかねと。捨てようと思っても、捨てる身がない。一生懸命で、「自我に死になさい」というが、いったい自我というのはどこにあるのでしょうかというようなわけだな。もう天と一つの自在な姿であって、こればっかりは疑えないという。本当にこれは無の境地に入ったところの、木喰和尚の天一自在という境地です。

イエス・キリストがその最たるものである。イエスは空々漠々たるもの。しかしながら、ひとつ在る。何かというと、彼にとっては在るものはただ「父」だけだ。これに対してはもの凄い意識を持っている。これは一番根源のもの。根源意識がもう御霊を離れてはありえないひとを「聖霊の人」という。「御霊を離れてはありえない」というこの根源意識は実は、自意識から抜けた意識です。まだ「自我」なんていうものを問題にしているうちはダメです。「それではもう先生は全然自我のない人か」と。決して然らず。「有っても、そんなものは問題にならないというところに来ているか」だけのはなし。そんなものをいつまでも問題にして、百年たっても二百年たっても、私はどうにもならん。そういう、あるがままのガラクタを捨てて、どっしりと尻餅ついているような。それが自我から抜けているということ。

パウロはこの天地一如の世界に入ってしまっているから、「共に甦えらせられ」という。あの驚くべきキリスト、今もなお、主は万象に貫き在るところのもの凄い生命力を持っておられる。「風よ、静まれ」と言えば、風は静まった。「無花果よ、枯れよ」と言えば、無花果が枯れてしまっている。腐りかかった死人に「甦れ、出できたれ」と言えば、ラザロは出てきた。そういう人です。福音書のキリストにでっくわして、たまらなくなってしまって、「もうキリストだ。このキリストのほかに何が必要か」というわけです。

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」と言われた。「幸いなるかな、霊の貧しい者」とは、そのように、小さな自意識、小さな自主なんてものから抜けたようなところに入る。完全に神のとりこ、キリストのとりこになると、自由になる。「風吹かば吹け」というようなことです。これが、「共に甦らせられ、共に天の処にどっかりと坐らせてくださった。私たちは天国人である」とパウロは言う。「天国は何処にあるか。お前たちの中にあるじゃないか」とキリストが言われた。

7**こうして、神は、キリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになった慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。**8**事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。**

広大無辺なる豊かなる恵みの極み。恵信ということ。ここも恵信一如である。恵みが先行する。キリストの恵みなくして何の信仰か。「信仰」の「仰」の字なんかいらん。仰いでばかりではしょうがない。中に入らなくては。もはや天は地にきたっている。詩篇85篇に、「天と地とは接吻した」と書いてある。

「10**あわれみと真実とともにあい、義と平和とたがいに接吻(くちづけ)せり。**11**まことは地よりはえ、義は天よりみおろせり**」（詩篇85・10～11）

とある。そういうように、水天髣髴、天地一如の事態に、「天は地なり、地は天なり」という事態に来てしまう。キリストという恵みそのものによって、私たちはそれを受けとることによって救われたということですよ、「信仰により」というのは。「キリストという恵みを受けとったら救われました」と。何も難しくはない。これが、「恵みにより」ということ。「恵みにより、信仰により」ということは同じ一つのことをパウロが言ったわけです。

キリスト自身が本願体ですから。キリスト自身の本願体を受けとったら、私も本願的なものになってきましたと。こちらは悲願だったのが、本願悲願これ一如の世界に入っていく。これが、「汝の御意を成させたまえ」ということ。

9**行いによるのではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。**

このように圧倒されたのは、自分の側の願いどころのさわぎではなかった。とんでもないものにぶつかったと。「行為」とパウロが言ったのは旧約的な意味の行為であって、キリストは、「神の御意を行なうものでなければ天国に入れない」というのは、「神の御意を生きるものでなければ」ということですよ、あの「行なう」というのは。そう訳した方がいいくらいだ。「御意を生きるもの」でなければ天国に入れない。外側からいくら行なったって、それはダメです、いわゆる律法的行為であったら。

10**なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。**11**だから、心に留**

**めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。12また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。**

キリスト・イエスの中で改良、新造された。「手による割礼を身に受けている人々」というのはユダヤ人だよな。伝統的に八日目に割礼を受ける。肉の割礼です。「お前たちは無割礼、無信仰だ」なんて。ローマ書2章の終りの方に割礼のことが書いてある。28節、

**「28それ表面のユダヤ人はユダヤ人たるにあらず、肉に在る表面の割礼は割礼たるにあらず。29隠なるユダヤ人はユダヤ人なり、儀文によらず、霊による心の割礼は割礼なり、その誉は人よりにあらず、神より来るなり。」（ロマ2・28～29）**

「隠なるユダヤ人はユダヤ人なり」というのは、本当に内から改造されたユダヤ人はユダヤ人ということで、そのユダヤ人はもはや単なるユダヤ人のことを言っているのではない。「儀文によらず、霊による心の割礼は割礼なり」と。はい、これです。彼らユダヤたちは、割礼を受けていて、これは「選民」には相違ない。けれども、それにいわゆるあぐらをかいてしまってどうにもならん。ところが、異邦人は律法を持たない、割礼も受けてないからと言って、ユダヤ人はこの律法と割礼を大いに誇っているけれども、そんなものは心配いらんよと、パウロが言おうとしている。

**13しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。14実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、15規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました。**

神の律法から遠く、律法も知らずに、割礼も受けない、その「以前は遠く離れていたあなたがた」は、かえって彼らよりも神さまに近くなってしまったんだよと。「キリストの血」によって。この「血」というのは、ユダヤの宗教がもともと血の宗教ですから。「血は生命のあるところ」という。疵なき羊の贖いによって贖罪の儀式をやっていたわけです。それがイエス・キリストという本当に人間の罪を背負うことのできたただ一人の血によってと。モーセの十誡以外にいろいろな戒律がある。そんなものは全部キリストは排した。キリストはいわゆる律法を破ってしまった。けれども、本当の律法を律法以上に満たした。だから、「律法をこぼたんためにあらず、全うせんために我は来れり」とキリストが言われた。ユダヤ人は選民で律法を持っているが、異邦人は、ギリシア人は律法を持たない。律法を持つものと律法を持たないもの、割礼のあるものと割礼のなきものとを、キリストは一つにし

てしまった。

**こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、16十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。**

はい、私が今日ここに「新次元の人」と書いたゆえんのものはこの句に発する。「新人」でもいい。この「一人の新しい人」ということ。本来のそういった血筋のユダヤ人、それに対してギリシア人。この二つのものが一つになる。ユダヤだギリシアだといって、いくらこれが争ったってダメです。パウロさんがちゃんとここで言っている。「二つのものが一つになる」と。では、二つのものがどうして一つになるんでしょうか、というはなしだ。

ギリシア人は要するに人本主義的な自主性というやつ。その流れはずっと現代まで来てます。ユダヤ人は、確かにこれは神の選びの民に相違ない。啓示を受けた民です。けれども今度は、宗教の事態を、信仰の事態を私している。どんなにそれが立派であっても、それを「パリサイ」という。ユダヤ精神の代表的なものはパリサイ主義なんです。それのチャンピオンが誰あろう、パウロであった。彼がユダヤ精神のチャンピオンの代表者であった。

パウロはサウロといっていたときに、非常に熱心なんです。神に対する熱心は、誰かこれに及ばんという人だった。そして、「律法（おきて）の義につきては責むべきところなし」と、彼自身が言っている。「律法（おきて）は聖なるものにして」とパウロが言った。その場合の律法（おきて）というのはいわゆる律法としての律法ではない。厳として世の末まで神の律法は、霊法は貫いている。けれども、その律法を私して、「我こそは」とやっている。これはイズムに凝ったやつ、イズム的人間なんです。神のことも人間の方に切り換えられてしまって、人間の方のことだけで、神さまの方でない世界はダメなんです。

どうしても、これを本当に廃してここから次元のちがったところの――第三の次元といいますか、第三の平面といいますか――そのところに来なければ、これを本当に活かすことができない。要するに、すべての営む主体は人間だから、人間そのものが別な次元に入らなければ。それが「新次元の人」に、パウロのこのエペソ書をとおして示されるわけです。「一人の新しい人に造り上げて平和を実現」するとパウロが言っている。自分たちはなるほどユダヤ人であった。律法を律法として非常に尊重してきた。けれども、この律法の義に執していたのはいかに間違いであったか。「律法におけるわが義というものを塵芥（ちりあくた）のごとく思う」とパウロは言いました。これはピリピ書に書いてある。パウロは律法を乗り越える。キリストは律法の終りとなった。「律法、律法」と言っていたのが大きな間違いだったと。パウロは一生懸命にとっくんだが、どうにもならない壁にぶつかった。ルターもそうです。「神の前にいかにして自分が義たらんか」といって苦しんだ。いかにして自分が神の前に義であるかということに苦しみ抜いた。「ああ、この死の体（からだ）より我を救わんものは誰ぞや」という、パウロのロマ書7章の告白と同じです。「汝、キリストなるがゆえにわれ感謝す」と。

もう死に瀕したものを本当に救ったものはあなたですと。

キリストは、どうして律法を全うできたんですか。彼は神の子で、とにかく完全に別といったような、そんな角度からキリストはこの律法を全うしたのではない。「私のように完全になれ」なんて言いはしない。ところが、キリストは、「父の全きがごとく全かれ」と言われた。キリストが自分は幼子（おさなご）のたましいです。「自分は無力です。何もできません。あなたを離れて私はありません」と。

あなた方は、空気を離れてありますか。空気にこうやって身体が包まれている。空気は私たちに浸透している。鼻から呼吸して、時々刻々、血液は浄化されている。常に我々の肉体の浄化運動を行っている。生命化されているわけです。いわんや我々の魂は常にこの霊化運動をしてなかったらダメなんだ、霊化作用を。魂が霊化作用を起こしていなくては。ことごとにぶつかっては、魂が霊化作用を起こしていくような人にならなければ、なんか魂が窒息してしまう。このキリストが無かったら、本当の自由さというものがなくなってしまう。「新しき次元の人」というのは、キリストのこの霊を本当に生命として、「キリストの霊がわが血であり、わが肉である」と、霊血霊肉の人にさせられていく。

イエス・キリストの「山上の垂訓」は十誡以上の言葉です。山上の垂訓はモーセの十誡をはるかに超えた言葉と言っていい。旧約の律法は、「なかれ」という言葉が非常に多い。あれは実は、「殺すなかれ」ではなくて、「汝、殺さない。汝は殺人しない」という、律法の根本精神は断言である。「汝は殺人しない。私がお前の神だから、汝は殺人はしない」と。人間はサタンにすぐ足をすくわれる。「だから、殺人はするなよ」との禁止にもなる、また戒めにもなるけれども。本来は、信じかかっている。親が子どもを信じないで、親子の関係が成り立ちますか。子が親を信じないで、親子の関係が成り立ちますか。友人関係が本当にお互いを信頼しないで、本当の友人関係が成り立ちますか。相手をどん底から信じるということが相手を救う。「こんなにも私を信じてくれたか、私は悪かった」と。「律法の根本精神は福音である。律法は隠れたる福音である」と、私はいつか言った。律法を律法とするから律法がダメなので、この「隠れた福音」を露（あらわ）な福音としたのがキリストの福音です。

天地を貫いて神の霊法は明かである。法則に本当に則（のっと）ることが自由自在であるということ。天衣無縫。「ああ自然はいいなぁ」という。自然は自然法則の中に動いている。造られたものでなくて、すべて自（おの）ずから発したものです。自ずから発したものというのは、そういった自然天然の法則です。私たちの人間界がそのような、魂が本当に霊的法則でもって自由に動いて、信と愛とが、「信愛一如」の世界が展開していったら、なんと素晴らしいだろう。そういうような信愛一如のような霊的な次元がこの「新次元の人」である。この霊はどんなこの世の力も、これを屈することができない力を持っている。「神の国は言葉にあらず、力にあり」とパウロが言ったその力とは、神の霊的生命の世界のことを言っている。この神の霊的生命を本当に宿す人です。

世界がどう引っくり返ってもいい。この法則をどんなに現実が受けとらなかろうが、それに敢然としてこれを成就していく。「神の国を建てていこう」という意欲に燃えて進んでいく人。どんなに逆らわれても、絶対に屈しない人。これは神の国を本当に建てることが万人救済の道と信じているからです。「有れども無きがごとし。無けれども有るがごとし」という本当に自在で、何ものにもとらわれない。とらわれているのはただこのキリストの活ける霊にである。キリストの活ける霊にだけ本当にとらわれて生きている者は、「新次元の人」です。もはやただキリスト者なんていう言葉では表せないから、私はこう言うんです。

いわゆるギリシアも、いわゆるユダヤも、この二つのものを一つにして、本当の平和を来らせたものが、この「十字架・復活・聖霊」のキリストである。一部のユダヤ人は本当にパウロと共に回心した。使徒たちはみなそうです。人間の賜物やなにかはいろいろちがう。決して神さまは類型的に人をつくらないから。あなた方はみんなそれぞれで、「天下一品」です、ひとりびとりが。しかし、このキリストの霊を持った新次元の人として皆さんが一つである。ここに本当に平和がある。平和はまず、「神―キリスト―我」という関係が本当に立つこと。これが本当の「平安」「シャーローム」という。このシャーロームはまずこの縦の関係が本当に立たなければ。人間相互の横の関係をどんなに握手したってダメだ。

**「双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、**[16]**十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、」**

ということ。ギリシアとヘブライの怨み。ソ連と中共とアメリカ、何とかかんとかの怨み、お互いの憎しみ、疑い、そんなものを滅ぼすものは、ひとつだけ。為政者が本当に平伏すか。ほとんど不可能です。このキリストの祈りの世界では、キリストにあっては、その時どんなに現実が実現しなかろうが、その祈りはいつかなんらかの形で遂げられていく。審判となって現れるか、知らんですよ。とにかく、神さまは私たちの、この神の本願に即したところの悲願は必ず受けとってくださる。「よし、お前たちの祈りは受けとった。私がいいようにしてやるぞ」と。全部これはキリストに、神さまに任しておけばいい。自分の思うとおりに一向ならなくてもいい。いや、我々の願い以上のことが神さまはしてらっしゃるから。そこが本当に我々の祈りは聞かれているということです。我々が本当に自分を投げ捨てたところの祈りは必ず聞かれている。「聞かれるだろうか？」ではない。御霊に即した祈りは必ず聞かれる。そして、「御霊の執り成しをもってどうぞお受けとりください」と、平伏していかなくてはいかん。

そして、この新次元の人となったら、どんなに敗北のようにみえても、絶対に敗北ではない。失望はない。そういう本当の勝利。神の国は成る。どん底からの救いを人にもたらすべきところの悲願。「教会の、無教会の」と品定めなんかしているのではない。私はもうそんなところは超越してしまった。どうでもいいですよ。この福音を知らないひとがたくさんいるんだから、そういう新鮮な魂に呼び掛けてください。

16 **十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。** 17 **キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。** 18 **それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。**

パウロが本当に喜んで言っている。もうギリシア人もユダヤ人もない。みな一つだと。もう奴隷も自主もない。ギリシアもヘブライもない。アッシリヤもエジプトもない。みんな一つになるという。一つ御霊でもって全く一つにされたことを平安とか平和とか言う。

一つになる。我らはこのキリストで一つだ。私のこの中に燃えているこの悲願に、あなた方がなにはさておき、電流が通ずるよりも霊流が通ずるように、ウワッと一つになる。これですよ。そうしたら、それで乗り切ったら、もう相対的なことは問題にならない。それでなければ、「新次元の人」なんて言えない。新次元の人というのは、相対的な世界を超えた、本当に何ものもこれを屈することのできない驚くべき生命力を持ったところの事態です。これだけが本当に世を救う原始力です。どんなに人数は少なくてもいい。たとえ一人になってもやるぞと。

19 **従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、**

預言者たちはヤーヴェーの霊に取りつかれた人たちです。そして立ち上がった。そういう聖徒と預言者たちと同じ同国人、天国人となって、私たちは神の家族になってしまった。コリント前書3章16節に、

「16 **汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊なんじらの中に住み給うを。** 17 **人もし神の宮を毀(こぼ)たば神かれを毀ち給わん。それ神の宮は聖なり、汝らも亦かくの如し。**」（コリント前3・16～17）

とある。「生きた神の宮である」という。それから、もうひとつ前の方にも「建物」と書いてある。9節、

「9 **我らは神と共に働く者なり。汝らは神の畠(はたけ)なり、また神の建築物(たてもの)なり。**」（コリント前3・9）

宮だとか、家だとか、家族だとか、建物だとか、同じことをいろんな言葉で言っているだけのはなしです。私たちが「新次元の人」になりましたならば、もう我々はみんな霊的家族なんです。親子、兄弟、姉妹です。キリストが、「これ汝の母なり、これ汝の子なり」と、ヨハネとマリヤに言った。我々は本当に霊的な家族です。そういうように本当に霊的家族、兄弟姉妹としてやってください。人間的なものを――あるときは人間的で結構ですけれども――それを本当に突き抜けたものを持ってなければいかん。

私たちは新次元の人、新次元の「新人類」である。パウロ、預言者、使徒たちの霊生を

直ちに継いでいるものである。歴史の何千年であろうとも、そんなものをグーッと現実化して、また未来も現実化して、未来も過去も本当に現実化して生きるようなひと。これが本当に永遠を持っている人です。この永遠を持っているところの、「天地一如」にしているところの人間、これが新次元の人。そのようなもの凄い、何ものもこれを屈することのできない生命力。もう我々は、この聖書の呻き叫んでいるところの現実に直結している人たちである。聖書解釈や、意味がどうだなんて、そんなことをこじくり回しているのではない。皆さんは直々（じか）にじっと見ているうちに、その字の背後から迫ってくるところの根源の言葉に触れる。そういったような人が本当にそれぞれのところにおいて、自分の相対的ないろいろな問題や事柄を本当に支配し処理していくことのできる人なんです。

藤井武先生が、最後に日本がこの福音の世界で霊的な直観の世界で、何となく憧れていたところの世界を、私たちははっきりつかんでしまっている。この聖霊です。内村先生、藤井先生が方向づけていたことのもっとその先を、霊的な使徒的な信仰の次元をいただいています。これは誰が何と言おうとも、私はこれを告白しなかったならば、このキリストを否むことになる。

**20 使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、**

パウロはちゃんと言っている。ペテロ前書2章のところで、「キリストは活ける石である」、活石であると言いました。ペテロ自身が「巌（いわ）」だなんてキリストに言われたけれども。私たちは、預言者・使徒たちの霊統を継いでいるところの直結のキリスト者です。「われ福音を宣（の）べ伝えずば災いなるかな」とパウロが言った。

**21 キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。22 キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。**

なんと、私たちに暖かい、東洋的な言葉でしょうか。もともと福音は東洋的なものですが、そういった「一つ」ということです。キリストの霊法においては、カトリックもプロテスタントも、教会も無教会も幕屋もありはしない。もう本当にこれが一つ。在り方はみなそれぞれでいい。けれども、そこに本当にキリストの霊が働いて、本当に霊法が動いているか。これだけが問題です。そこにおいて初めて霊的次元の人となれば、一つとならざるをえない。もの凄い多である。もの凄い多であって一つである。「一即多」という。「一即多・多即一」という事態。そうしたら、もう相対的なことでもってどうのこうのなんて言うのはバカらしくなる。次元的な相違です。単なる段階的な相違ではダメです。質的な次元的な相違とならなければ。これはなるんです。キリストの霊は次元がちがうんだから。キリストの霊でなければダメですよ。

第二回のところは要するに、この1章、2章においては、我々、「個」が、この個的存在

が徹底的に変わることです。内的に根源的な現実において質的に、次元的に相違をきたすこと。これがもう先決問題です。常にいろんなことにぶつかっては、躓いたり転んだりしてみては、この十字架のキリストの下に本当に平伏す。十字架されている自分というものを本当に見る。そこでその十字架され方が強まっていく、深まっていく。と同時に、必ず霊的に「聖霊の次元の人」にいよいよ深められる。これでいいというところはない。この新次元の人は成長してやまず、新次元の人として成長してやまず。常に展開してやまず。

それは自分の力で展開するのではない。ちゃんともの凄い磁極があるから。霊的磁極が引っぱっているんだ、磁石を。私たちは磁鉄だから、霊極を指さざるを得ない。キリストに引きつけられる。キリストは引きつける存在である。これがもうたまらなくなってきたら本当です。常に福音書に帰りなさい。福音書でキリストにぶつかりなさい。そうしたら、キリストにぶっ倒されながら引きつけられていくから。キリストは私たちをぶっ倒し、降参させながら、どしどし凄くしてくださる。ただ頭をなぜているのではない。

どうぞ、皆さん、生きのいいクリスチャンになってください。そうしたらば、どういう現実に出遭っても、何だかしらんが、そいつが磁石みたいな人で、今度は周りの人たちを磁鉄みたいに引きつけるような人になるから。会社に行こうが、学校に行こうが、どこに行こうが、「何かあの人はちがうな」と。そして、困ったことや悲しいことにでっくわしたら、「大丈夫です。心配いりません」というわけで、そこが伝道になる。伝道とは具体的なことを通して行く。詩篇42篇に、

**「1ああ神よ、しかの渓川（たにがわ）をしたい喘（あえ）ぐがごとく、わが霊魂（たましひ）もなんじをしたいあえぐなり。2わがたましひは渇けるごとくに神をしたう。何（いず）れのときにか我ゆきて神のみまえにいでん。」（詩篇42・1～2）**

とある。「神」の代りに「キリスト」と読みなさい。私たちはキリストを慕うこと、鹿が谷川の水を慕うがごとくに慕いあえぐ。喉が渇いたときに、真清水を飲むくらいさわやかなことはない。何といっても人間は一番単純なものを要する。どうですか、ここらの木々は何か肥料をやってますか。何もやってない。雨水だけです。雨水だけを吸っては、こうやって青々と繁っている。こういう名もなき灌木や雑草を見て、ここに本当に天的な生命力がある。我々はこのキリストという無色透明の霊的な真清水、聖霊を飲んで、他に何が要るかというわけです。この山の木と我とは一つなりという。そういうようなのが、私たち「霊的新人」なんです。